

フィンランド大使 として感じたこと

前 在フィンランド日本大使館
特命全権大使

は せ が わ の り ま さ
長谷川 憲正

ITUクラブの輝かしい発展に無上の喜び

ITUクラブのメンバーの名簿を見せていただくと懐かしい名前がいっぱいで、本日は幸せに思っております。2003年11月末に大使の職を辞任させていただき、あちこち挨拶に回っておりますが、先輩の方々がどこで何をなさっているかを見つけることから始めております。浦島太郎になっておりますから手間取っております、まだまだお伺いしていない状況にありますので、この場を借りてお詫びをさせていただきますとともに、無事に戻ってまいりましたというご報告をさせていただきます。

2000年11月にフィンランドに出掛けましたが、その際も皆様方には盛大な歓送会を催していただき、感激いたしましたのがついこのあいだのこのように思います。あつという間に3年がたちまして、この間に日本では大きな変化があったと思うのですが、私の目から見ると一番大きな変化はITUクラブ総会が豪華になったということでございます。かつての例会を思い出しますと、郵政省の食堂でやっておりましたり、どちらかというと薄暗い雰囲気の中で、一番のご馳走がバナナだったりというようなこともあり、それから考えると大変豪華になりまして、ITUクラブの発展を喜んでおります。また、私も戻ってまいりましたので、これからは応援をさせていただければと思っております。

隣国としての国、フィンランドと日本

フィンランドでは私は大変得をいたしました。フィンランドは「森と湖の国」「サンタクロースとムーミンの国」ということで知られておりますが、それと同時に、ITの国、ノキアの国であります。私は外務省以外の省から行った人間で

すが、「自分はMinistry of Post and Telecommunicationsから来たんだ」と言うと、向こうの人は「なるほど。いい所へ来たね」とおっしゃるのです。そういう意味で大変得をいたしまして、とりわけノキアの幹部の皆さんには仲良くしていただき、総帥には家まで来ていただいたりしました。

フィンランドは関係の深い国でありまして、最初に、天皇陛下からいただきました大使の信任状というものをフィンランドの大統領のところへ届けにまいりますと、フィンランドは女性の大統領なのですが、儀式が終わって最初に言われたことは、「フィンランドと日本はロシアを挟んで隣同士ですものね。仲良くしましょう」ということでした。日本からはそういうふうにご覧になる方は少ないと思いますが、フィンランドの方は皆さんそうおっしゃいます。

日露戦争から現代に至るまで続いている日本への信頼感

これはフィンランドの歴史と関係しておりまして、フィンランドの人は日本のおかげで独立できたと思っているのです。今から98年前になりました。日露戦争でロシアのバルチック艦隊がフィンランド湾の奥のサンクトペテルブルクの軍港から、ヘルシンキの前を通って遠回りをして日本海までやってきたところで、東郷平八郎元帥率いるわが日本海軍と遭遇して彼らは大敗をする。ロシアはここで日本に負けたがために、それまでヨーロッパ方面に置いていた軍備を東に移して日本に備えざるを得なくなったのです。

当時のフィンランドというのは、ロシアの支配下にあった属国でありまして、軍隊がいなくなって手薄になったときに力をつけて1917年のロシア革命の混乱に乗じて独立するわけですね。そういう意味では、日本のおかげで独立できたというのはあながち誇張ではなく、そういうふうにご覧になるフィンランド人がたくさんいらっしゃるのです。ですから、皆さん日本が大好きです。

例えば何かの集まりがありまして、私が日本人と見ると、皆さん「コンニチハ」と声を掛けてくださる。町を歩いても、「コンニチハ」とか、「コンバンハ」と言われる方もありますが、ヨーロッパで知らない人が日本語で声を掛けてきたらスリか何かだと思ったほうが間違いないのですが、フィンランドの場合は、純粋に日本が好きで、そういうふうにご覧になる方が多いのです。

日本の文化に対しても尊敬心が強く、花屋さんの名前も「SAKURA」とか、「BONSAI」とか、「IKEBANA」などと付いています。ノキアの幹部の方々と会っても、「ノキアは日本の会社と間違われるんだよね」ということをおっしゃいま

す。これは外交辞令だと思いますが、そういうことを言われること自体、日本に対する尊敬心、信頼感というものが強くあるようです。

今、世界の携帯電話市場の4割近くを占めるノキアも、蓋を開けてみますと中身の部品の8割は日本製品です。ノキアというのは自分の身の程を知った会社でして、自分では部品は作らないで世界中から一番安くて良いものを買うというわけです。その結果、8割が日本製品ということですから、日本の底力はすごいなあと思う次第です。

人間も産業もジョイントが円滑にしている両国

フィンランドはノルウェーなどと違って石油も出ませんし、ガスも出ません。天然資源は木しかないという国ですから、教育に力を入れ、科学技術の振興に力を注いでいます。その成果の一つが現在のノキアだと思うのですが、人口520万人の小さな国でありますので、自分たちだけで何でもできるとは思っていないで、目はいつも外を向いているのです。現在はEUの一員でもありますし、ユーロにも参加しているわけですが、ロシアの恐怖から逃れるためにヨーロッパの国に近づきたいと思うと同時に、自分たちの生きる基本であるところの科学技術振興のためには、日本と組みたいという気持ちが大変強いようです。

私も向こうで日本の科学技術庁に当たる省のトップの人から、日本とジョイントの研究を増やしたい、大使も手伝ってくれと再三にわたって依頼をされました。皆様方も興味とご関心がありましたら、私が間を取り持ちますので、フィンランドとのジョイントもお考えになったらいかかかと思えます。

大変に我慢強く、柔軟な精神を持つ国民でありまして、最近のジョイントの例で言いますと、エレベーターの会社の提携がございます。フィンランドのような広大で真っ平な、土地がいくらでもあるという国で520万人の人口しかないので、エレベーターなどは絶対必要ではないはずなのに、不思議なことにコネというエレベーターの会社があります。この会社が2年前に東芝のエレベーター部門と組んでいるのですが、これが大変うまくいっておりまして、今やこのグループは業界第3位であります。主力のマーケットは中国のようですが、日本人とフィンランド人の相性は良いようです。

現在、在留邦人が800人ほどおられますが、その半数以上が現地の人と結婚してしまっていて、どこもみんなうまくいっています。日本の男性には、尻に敷かれているとは言え、非常に優しいフィンランド人の奥さんが付いていますし、日本の

女性には大変優しいご主人が付いているということで、とてもうまくいっているようです。

中国の影が濃くなるにつれ、日本の影が薄くなる現状

このようなフィンランドで楽しい3年間を過ごしたわけですが、向こうから見ていて気になるのは、日本の影がだんだん薄くなっていることです。中国の影がどんどん大きくなることと反比例しているのですが、フィンランドにやってくる日本人の数が停滞していることに原因があることも確かです。中国からは毎年3割、4割増という感じでフィンランドに来る人が増えている。SARSがあろうが、テロがあろうがどんどん増えている。それに伴い、政府の要人も多数やってきます。副大臣クラスを含めると、フィンランドのような小さな国でも1年間に20人ぐらいの高官が中国からやってきます。

今、フィンランド航空の直行便が日本とヘルシンキの間を飛んでいます。これは20年の歴史を持つ航路です。実はヨーロッパで最初に日本に直行便を飛ばしたのもフィンランドでありますし、最初に日本車を輸入したのもフィンランドであります。そういう近い関係にある国なのですが、成田のキャパシティがいっぱいなものですから、いまだに週2便しか飛んでいないのです。今年の6月から大阪にも3便飛ぶようになってようやく5便になりましたが、北京からは毎日飛んでいますし、上海からも飛びます。

そういう状況で中国の影がどんどん大きくなり、相対的に日本の影が小さくなってきている。日本をよく知っている人は、日本はすばらしいとおっしゃいますが、日本を知らない人は、英米系の新聞から流れてくるニュースが多いものですから、日本の経済はガタガタだとか、失業者で溢れているという話が多くて、日本に関する関心が薄らいでくるように思えて残念で仕方ありません。



再びフィンランドをはじめ世界の熱いまなざしを注がれる日本に

私は、日本は今でもドイツとフランスを足したよりも大きな力を持っている国だし、新しい技術はどんどんできているし、ルイ・ヴィトンの売上の3分の1は東京なんだという話をして挽回に努めていますが、政界・官界・財界等々でご活躍の皆様が何かの機会にフィンランドへ行かれて、日本の実情を伝えることが一番いいことだと思っております。ともかく、どんどんフィンランドへ足を運んでいただければありがたいと思うのです。

2004年の春には向こうから大蔵大臣、外務大臣、商務大臣という3人の大臣が来日されますし、秋には大統領をお招きするということから、フィンランドとの関係はまた一段と盛り上がるだろうと思います。

フィンランドは女性の地位が高いことでも知られていますが、大統領も女性ですし、ヘルシンキ市長も女性ですし、前の首相、国会議長も女性であります。そうでなければ小さな

国はもたないのですが、男女が助け合って頑張っております。この国は日本の将来にとっても大事な味方になる国だと思いますので、お付き合いをいただければありがたいと思います。

日本にもっともっと元気が出て、世界から「やっぱり日本はすごいね」ともう一度思ってもらいたいのは、みんなの願いだと思います。日本を手本にしている国が世界にはたくさんあるわけです。ヨーロッパの国々も、今、多少は中国に目を行っています、日本の底力というものはわかまえているわけですから、大いに元気を出して、もう一度、世界のなかの機関車として活躍していけたらと思います。それには、まずはテレコムの世界で頑張っていたことが重要なのではないかと、外から見て感じた次第であります。

業界の皆様方のますますのご発展、ご健康、そして、ITUクラブのますますの発展を祈念させていただきます、ご挨拶に代えたいと思います。ありがとうございました。

(2003年12月18日 第32回ITUクラブ定期総会より)